



四万十町
町内「ふらへり」散策

柳瀬

やな
ぜ



県道 19号（窪川松葉川線）を、その起点となる根元原から北上する。東川角を過ぎ、竹林をくぐった辺りで四万十川に沿って左へ大きく旋回するのだが、この辺りからおよそ1kmにわたっての1帯が柳瀬地区である。明治9年、柳瀬村を含む近隣7村が合併して七里村となった。現在も地名表記は「七里」である。29世帯60人が暮らしている。

柳瀬（やなせ・やなぜ）という地名は全国に多い。町内にも十和地区に柳瀬と書いて「やなぎせ」という集落がある。全国の「柳瀬」を調べてみると、ほとんどが川沿いにある。地名の由来はそのたいがが鮎（あゆ）などを捕る「築漁」の漁場であったという。詳しい方に聞いたところ、昔からこの柳瀬地区も、築漁に似た漁法が盛んに行なわれてきたらしい。やはり地名の由来は「築漁」からきているのかもしれない。

さて、柳瀬地区の南端で、四万十川が山の壁に「ぶち当たる」ように折れ曲がる。大水が出た時には、この折れ曲がりによって川の流れが妨げられ、直前にある柳瀬地区に水害をもたらしてきた。今年の台風でも大きな被害を受けた。過去の記録を見ても幾度となく被害を受けている。中でも、明治23年の水害では甚大な被害を受けたという記録が残っている。明治



明治23年に書かれた「年代記」には水害の状況が詳細に記されている



かわいらしい表示板

23年の水害といえ、以前このページで紹介した西川角の「川モクの伝さん」の時のことである。

水害は人間におびただし損害を及ぼした後、置き土産として肥沃な大地を約束する。したがって、柳瀬の田畑は、過去に受けた大水による被害の分だけ肥えているという。

江戸時代初期、土佐藩家老窪川山内氏の知行地（年貢徴収権を認められた実質的支配地）だった頃に、新田開発が盛んに行われた。その後も「水害と再整備」を繰り返しながら拓かれてきた広々とした柳瀬の農地では、現在、花き、生姜、稲など様々な作物が育てられている。

ところで、柳瀬の集会所の、ガラス板に書かれた表示板が実に良い。下書きの跡が残っていたりしてかわいらしい。デザインとして成り立っている。

町のうごき	(10月31日) 人口		前月比		出生		死亡		転入		転出		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
	8,691	9,774	-11	-14	7	6	18	15	6	11	6	16	
	18,465		-25		13	17	33	17	22				
	8,676		-8		(10月中の届出)								

四万十川の 水質状況	適正值(mg/l)		11月7日	
	項目	基準値	測定値	状況
リン酸	≤ 5.0	0.487		
硝酸	≤ 0.5	0.441		
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下		
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.150		
化学的酸素消費量	≤ 10.0	測定範囲以上		

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/> ●

※ 広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)